

用語辞典

ERP【イー・アール・ピー】

Enterprise Resource Planning(エンタープライズ・リソース・プランニング)の略。日本語では企業資源計画などと訳される。

企業の経営資源は、従業員を含めた人員と生産した商品の在庫などといった物的資産、そして資金に分けられる。ERPはこれらの配置や配分を、部門間の壁を越えて全社的に最適化し、利益の最大化を図るために効率的に管理/運用を行なっていくための概念や考え方である。

このERPを実現するための情報システムとして、各社から提供されているのが「ERPパッケージ」と呼ばれているものだ。部門単位で利用する、たとえば経理パッケージなどといった従来の業務システムとの大きな違いは、全社的な経営資源の最適配置を実現するために、財務会計や生産/販売、人事などに係わるさまざまなデータを一元管理することが可能になっていることである。また、ERPパッケージ上にさまざまなデータが蓄積されること

で経営資源の可視化が実現できることなど、それ以外にもさまざまなメリットがある。

ただ全社横断的に導入することになるため、導入には数カ月から数年単位の時間が必要になり、導入や運用のためのコストも決して安価ではない。しかしながら導入し適切に利用できた場合のメリットは非常に大きく、そのため大企業のほとんどで導入経験を持っており、今後は中堅企業以下へも浸透し始めるとされている。

EA【イー・エー】

Enterprise Architecture(エンタープライズ・アーキテクチャ)の略。ITシステムを構築するときに無駄な投資を抑制し、利用価値の高いシステム導入を実現するためのものとして注目を集めている方法論である。

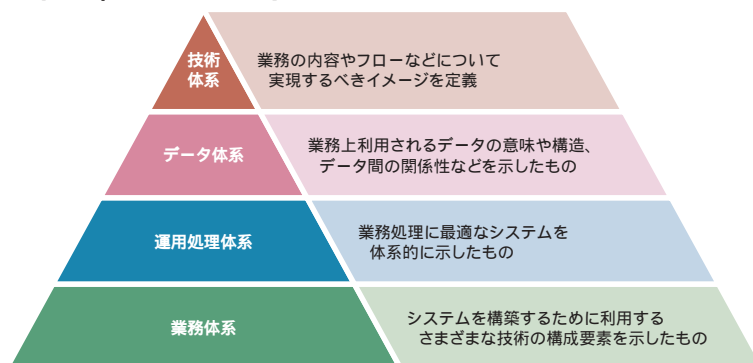
EAの軸となっているものの1つが、全社的な視点からの情報システムの最適化である。従来の業務システムは、時間(手間)やコストがかかる、すばやく必要な情報が検索できないといった問題を解決するという点では有効だった。しかし現場レベルでの最適化しかなされていないケースが多く、全社的な視点は欠けていた。そのため、たとえば製造に利用する部品のデータを、購買部門と生産部門の両方のシステムで管理する、などという無駄が生じていた。

そこでEAでは、業務や情報システムの現状を認識し、その上で図1に示した構造に当てはめるなどして理想的な状況となるモデルを策定する。そして両者を比較し、理想的なモデルを実現するための移行計画を立案し、それを実行していくという流れだ。

欧米ではすでにEAが広まりつつあり、多くの民間企業や政府機関で導入されている。日本政府もEA導入に積極的で、来年1月には全府省でEA策定が開始され、経済産業省ではそのための「EA策定ガイドライン」をとりまとめて公開している。

図1 EAにおける4階層構造

EA(Enterprise Architecture)の代表的な4階層モデル



ITIL【アイティル】

Information Technology Infrastructure Library (ITインフラストラクチャ・ライブラリ)の略。コンピュータシステムの運用において、質の高いサービスを実現するための方法について、英国商務局が作成したガイドブックを指す。

ITILでは、実績のあるIT業務プロセスが事例として数多く集められており、これを適用することでシステムの利用者に提供するサービスの高品質化を実現できる。

なおITILではサービスの提供者と利用者の中で、どういったサービスを提供するのか、サービス品質レベルの目標などについて合意し、それに基づいてサービスを提供することが重要になる。こうしたサービス品質についての合意書をSLA (エス・エル・エー : Service Level Agreement) と呼ぶ。この中で、たとえばクライアントからサーバに接続した場合の応答時

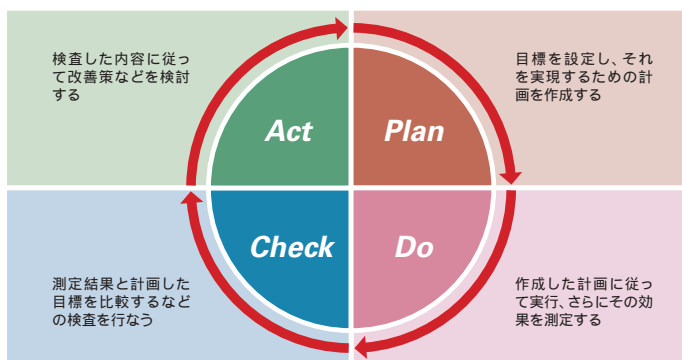
間は何秒以下に保つ、などといった内容を取り交わすわけだ。これによりサービスレベルを一定に保つ努力がなされるほか、提供者の責任範囲が明確化するというメリットがある。

またサービス品質を定期的にチェックし、より高いレベルを目指すための取り組みも重要である。そのために用いられるのが、PDCA (ピー・ディー・シー・エー) サイクルと呼ばれるもの。PDCAとは、目標に対しての

計画を立て (Plan)、それを実行し (Do)、計画どおり進んでいるかを検査し (Check)、そして検査内容に従って改善策を検討する (Act)、このサイクルを繰り返すことで、さらなるサービスの向上を実現するわけだ。

低コストで高品質の管理プロセスを構築できるITILの注目度は高く、今後多くの企業に広まることが予想される。システム管理者ならば注目しておいて損はないだろう。

図2 ITILを推進する上で重要なPDCAサイクル



ESB【イー・エス・ビー】

Enterprise Service Bus (エンタープライズ・サービス・バス)の略。現在企業におけるシステム構築の新たなトレンドとして、複数のシステムを連携させて新たなシステムを構築するSOA (エス・オー・エー : Service Oriented Architecture) が注目を集めている。SOAではソフトウェアや各種機能をサービスとしてネットワー

ク上に公開し、業務に合わせてサービスを相互に連携させることでシステムを構築する手法を指す。こうしてソフトウェア自体を部品のように組み合わせることにより、システムに新たな機能が必要になったり、あるいは古くなったソフトウェアを取り替えるといった場合でも、容易に対応できるシステムの構築が可能になる。

ESBはSOAにおけるインフラ (基盤) を提供するテクノロジーとなる。SOAでは標準的な仕様に基づいた方法でソフトウェアや機能間で通信することが重要になるが、ESBではそれらに対応し、ビジネスプロセスに従ってメッセージの流れをコントロールするなどといった処理を実現するために必要になる機能を提供する。